

『撰集抄』と『春日権現験記絵』詞書との使用語比較（二）

——「お」及び「を」で始まる語——

森 瀬 代士枝

はじめに

『撰集抄』と『春日権現験記絵』詞書とに類似関連する箇所のあることに触発され、『春日権現験記絵』詞書の語彙索引を作成した。

語の採録作業中、歴史的仮名遣いに相違する多くの表記例の見られること、また、同語であっても複数種類のかな表記が多く見られることに注意をひかれた。中でも、語頭に「お」及び「を」をもつ語に表記の一定しない例が多く見られた。

歴史的仮名遣いは、「契沖が平安時代初期以前の実例を蒐集・整理してあらわした、『和字正濫抄』（二六九五年刊）によって基礎づけられたところの、仮名表記の方式」（『日本語の世界？ 日本語の音韻』小松英雄 289頁）であるから、『春日権現験記絵』詞書に歴史的仮名遣いと相違する多くの表記例の見られることは当然である。また、『春日権現験記絵』詞書時代の仮名の表記は、次のような経過を経ていると考えられているので、複数種類のかな表記が多く

見られることも首肯される。すなわち「十世紀末ごろから、語頭のオとヲとの混用、語中語尾のハヒフヘホとワヰウエヲとの混用などが生じて来ると、事情は複雑になった。・・例えば顔という語は、本来 *kaŋo* という発音で、仮名ではカホと書かれたのであるが、音が変わった後は、カホともカヲとも書かれることになった。・・恐らく、一時代前の表記のイメージが残存しており、一方では単独にハヒフヘホという音節も存在したために、このような状態になったのであろう。これは、語頭のオとヲについても同じであり、又、やがて生じた、語中語尾のイ・エ・オとヰ・エ・ヲとの混同などについても、類似の現象が起ったと考えられる。そして、その段階になると、いろは歌の普及によって、仮名の種類は四十七文字という固定観念が出来、イとヰ、エとエ、オとヲは、音は同じでも仮名は違ふと意識されるようになった。」(『日本語の世界』 仮名』 築島裕 330頁)。

右の引用に続けて「ここで先ず生じたのが、語頭におけるオとヲとの仮名の使い分けである」と記されている。

本稿でも、『春日権現験記絵』詞書に使用された「お」及び「を」で始まる語の表記について調べたい。

『春日権現験記絵』詞書の表記は、なんらかの基準に依って使い分けられているのであろうか、恣意的なものであろうか。表記の傾向・特色といったものはあるのであろうか。

定家仮名遣いは、「鎌倉時代・室町時代を通じて、和歌や和文を伝統的に伝える人々の間で尊重され、継承され」(前掲書 331頁)、「『を』と『お』については当時のアクセントの相違に基づく使い分けであったと推定されている」(『国語学研究事典』272頁)。「春日権現験記絵」詞書の表記と比較したい。

合わせて、『撰集抄』(松平本 『撰集抄自立語索引』)の表記を『春日権現験記絵』詞書の例に比較したい。

『春日権現験記絵』詞書の、語頭に「お」及び「を」をもつ語の表記は、漢字表記のみ見られる語・かな表記のみ見られる語・漢字でも仮名でも表記される語がある。

かな表記に限って目を向けると、全ての語が、「お」「を」を混用して表記されているわけではないことに気付く。その語のかな表記の全例が歴史的仮名遣いに一致する語・全用例とも歴史的仮名遣いに相違する語・歴史的仮名遣いに一致する例と相違する例の混在する語が見られる。自立語について見てゆくと左の如くである。

かな表記の全例が歴史的仮名遣いに一致する語 (数字は用例数)

- おきな(翁) 1・おく(奥) 1・おこす(起こす) 2・おそろし(恐ろし) 1・おそろしげなり(恐ろしげなり)
- 1・おだやかなり(穏やかなり) 1・おとと(弟) 2・おとろふ(衰ふ) 1・おはす(御座す) 17・おびたし(夥し) 1・おふ(負ふ) 1・おほかた(大方) 1・おほきなり(大なり) 12・おほし(多し) 9・おぼし(覚し) 2・おほす(仰す) 45・おほす(果す) 1・おぼす(思す) 18・おぼつかなし(覚束なし) 1・おほふ(覆ふ) 2・おぼゆ(覚ゆ) 9・おもかけ(面影) 1・おもしろし(面白し) 1・おもふ(思ふ) 37・おもぶく(赴く) 1・おもむき(趣) 1・おもむく(赴く) 5・おろおろ(副詞) 1・おろそかなり(疎かなり) 2
- をしふ(教ふ) 2・をる(折る) 1

かな表記の全例が歴史的仮名遣いに相違する語

- おく(置く) 13・おく(起く) 1・おくる(後る) 1・おくる(送る) 1・おこたる(怠る) 4・おす(押す)

1・おと(音) 4・おのづから(自ら) 4・おふ(追ふ) 3・おろかなり(愚かなり) 3
 をさなし(幼し) 1・をし(惜し) 1・をりすつ(折り捨つ) 2

かな表記が、歴史的仮名遣いに一致する例と相違する例の混在する語

おこなふ(行ふ) お1を4・おこる(起こる) お7を3・おさふ(抑ふ) お1を2・おそる(恐る) お10を2・
 おつ(落つ) お4を2・おどろく(驚く) お4を2・おなじ(同じ) お9を3・おのおの(各) お1を9・おは
 します(御座します) お18を3・おもし(重し) お1を3・およぶ(及ぶ) お4を9・おる(降る) お5を6・
 おろす(降ろす) お4を1

をがむ(拜む) お6を1・をさむ(治む) お2を1・をしむ(惜しむ) お1を2・をりふし(折節) お4を1

「お」「を」の表記の混在する語「おさふ(抑ふ)」には、「涙を、さへて」(⑦434)・「涙をおさへて」(⑧571)という
 例があり、この例は、「お」と「を」の表記の使い分けに、直前の助詞「を」の影響は無いことを示している。発
 音・アクセント・活用形による区別との関係も無いことを示していると考えられる。また、「おこなふ(行ふ)」は、単
 独では「をこなは(未)」(⑬975・⑳1587)「をこなひ(用)」(⑮114)と、歴史的仮名遣いに相違する表記のみ見られる
 が、「とりおこなふ(執り行ふ)」になると「とりおこなは(未)」(③131)・「とりをこなは(未)」(⑮116)の二通りの表
 記が見られる。このことは、「お」と「を」の使い分けに連語か否かは関係しないことを示しているように思われる。
 右の如く「お」「を」は自由に用いられているように見えるが、多数出現する助詞「を」は「を」とのみ表記される
 ので、「お」と「を」のかなの区別は意識されていたと理解される。

かな表記の全例が歴史的仮名遣いに相違する語について一言すると、後に掲げる表に載る以外の語、おのづから
 (自ら)・おふ(追ふ)・をし(惜し)についても、定家が歴史的仮名遣いに相違する表記をしていることは、既に指摘

されている。^③

かな表記の全てが、「お」のみ、あるいは「を」のみで記されている語のうち、用例数の多い「おはす(御座す)」「おほきなり(大きなり)」「おほし(多し)」「おほす(仰す)」「おぼす(思す)」「おもふ(思ふ)」「おく(置く)」「は、意識的に「お」を「どちらか一方の仮名のみで表記されたのではないか、と考えてみることは許されないであろうか。上記七語のかな表記の決まっている事が、『春日権現験記絵』詞書の表記の特徴の一つといえるかもしれない。『撰集抄』(松平本)に目を転じたい。語頭に「お」及び「を」をもつ自立語の表記を、『春日権現験記絵』詞書の場合と同様に分類した。

かな表記の全例が歴史的仮名遣いに一致する語

- おゆ(老ゆ) 3・おうおう(擬音語) 1・おきな(翁) 1・おき(沖) 1・おく(奥) 3・おこす(発す) 10・
 おこす(遣す) 2・おこる(発る) 8・おさふ(抑ふ) 2・おそる(恐る) 2・おとす(落とす) 10・おとど
 (大臣) 1・おどろ(棘) 4・おどろかす(驚かす) 1・おとろふ(衰ふ) 4・おなじ(同じ) 7・おふ(追ふ)
 1・おふ(負ふ) 3・おびたし(夥し) 4・おほし(多し) 37・おほす(果す) 2・おほす(仰す) 1・おぼ
 す(思す) 31・おぼつかなし・さ(覚束無し・さ) 6・おほふ(覆ふ) 5・おぼゆ(覚ゆ) 61・おぼる(溺る)
 1・おぼる(臙る) 1・おぼろけなり(臙けなり) 6・おもくす(重くす) 1・おもし(重し) 4・おも(面
 2・おもしろし(面白し) 4・おもふ(思ふ) 100・おもむき(趣き) 1・おもむく(趣・赴く) 6・およぐ(泳
 ぐ) 2・およぶ(及ぶ) 4・おる(降る) 5・おる(織る) 1
 を(緒) 2・をかしがる 1・をかしげなり 2・をこなり 1・をしふ(教ふ) 11・をちかへる(復ち返る) 1・を
 どりあがる(躍り上がる) 1・をば(伯母) 1・をばな(尾花) 1・をみなへし(女郎花) 2・たをる(手折る)

かな表記の全例が歴史的仮名遣いに相違する語

おくる(送る) 2・おづ(怖づ) 1・おどろおどろし(棘棘し) 2・おのづから(自ら) 7・おのれ(己) 2・
おひ(笈) 2

をかし4・をぎ(荻) 1・をこがまし1・をさなし(幼し) 3・をさをさし(長長し) 1・をしみなる(愛しみ
馴る) 1・をの(斧) 1・をり(折) 3・をる(折る) 4・をんな(女) 1

かな表記が、歴史的仮名遣いに一致する例と相違する例の混在する語

おく(起く) お7を1・おく(置く) お20を23・おくる(後る) お7を4・おこたる(怠る) お7を5・おこな
ふ(行ふ) お1を2・おし(唾) お4を1・おす(押す) お1・を6・おそし(遅し) お2を3・おそろし(恐ろ
し) お9を1・おつ(落つ) お11を4・おと(音) お1を3・おとづる(訪る) お1を1・おとる(劣る) お5
を1・おどろく(驚く) お5を1・おのおの(各) お2を1・おのが(己が) お1を4・おはす(御座す) お105
を31・おふ(生ふ) お7を3・おや(親) お1を1・おろす(下ろす) お21を7・おろかなり(愚かなり) お13を
10・おろおろ(疎疎) お6を3・おろそかなり(疎なり) お1を1
をかす(侵す) お2を1・をがむ(拜む) お13・を4・をさむ(収・納む) お1を1・をし(惜し) お4を2・
をしむ(惜しむ) お10を4・をのこ(男) お2を2・をはる(終わる) お8を7・をめく(喚く) お2を1・を
りふし(折節) お7を1・をる(居る) お4を3・(をびく(誘く) 1 歴史的仮名遣い未詳)

『撰集抄』でもまた、助詞「を」は「を」とのみ表記されるので、「お」と「を」のかなの区別は意識されていたと思われる。

「お」「を」の表記の混在する語を見ると、たとえば「おこたる(怠る)では、「おこたり侍らぬこと」(479)、9-4<114>・「をこたり侍らざり」(3887、7-15<75>)と、同語の同活用形を二通りに表記する。また、複合語「おこたりなし(怠り無し)」となっても、二通りの表記が見られる(2633、6-2<50>・3125、6-10<58>)。このことは、発音・アクセント・活用形・複合語か否かの区別は、「お」「を」の表記の区別に関係せず、「お」と「を」は自由に用いられていることを示しているように思われる。

かな表記の全例が歴史的仮名遣いに相違する語のうち、後に掲げる表に入られていない語、おづ(怖づ)・おのづから(自ら)・をかし・をかし・をこがまし・をさをさし(長長し)・をの(斧)については、定家も歴史的仮名遣いに相違する表記をしていたことが既に指摘されている。⁽⁴⁾

かな表記の全てが、「お」のみ、あるいは「を」のみで記されている語のうち、用例数の多い「おこす(発す)」「おとす(落とす)」「おほし(多し)」「おぼす(思す)」「おぼゆ(覚ゆ)」「おもふ(思ふ)」「をしふ(教ふ)」は、意識的に「お」「を」どちらか一方のかなのみで表記されたのではないだろうか。そうであれば、上記七語の表記の一定している事を『撰集抄』(松平本)の表記の特色と目してもよいかもしれない。

右の七語のうち、「おほし(多し)」「おぼす(思す)」「おもふ(思ふ)」は、『春日権現験記絵』詞書でも多数の用例全てが『撰集抄』(松平本)と同じ表記の語である。

「お」と「を」の使い分けの問題ではないが、『撰集抄』(松平本)には「おうきおと、(太政大臣)」(506、9-9<119>)という表記が一例見られる。「おほきなり」「おほいなり」は、『撰集抄』(松平本)では漢字表記のみ。『春日権現験記絵』詞書では、「おほきなり(大きなり)」の連用形に「おほきに」という表記が四例(②96・③185・④580・⑤1576)見られるが、「おうきに」の表記は見られず、「おほきおと、(太政大臣)」という語は出現しない。

「仮名遣の起源についての研究」(大野 晋『仮名遣と上代語』一九八二年 12頁)には、歴史的仮名遣いに相違する定家の表記の実例二十三語を掲げる。

定家の仮名づかい書『下官集』(弘安本/文永本)は、『国語学大系 仮名遣一』(4・8頁)に翻刻されている。上『下官集』(弘安本/文永本)に示された語と「仮名遣の起源についての研究」に示された二十三語との重複を整理し、『春日権現験記絵』詞書と『撰集抄』(松平本)両書に不使用の語・漢字表記のみの語・助詞・不明の語などを除くと左の四十一項目の語を得る。

をみなへし・玉のを・をく露・をのこ・風のをと・をんな・をろか・おく山・おほかた・おもふ・おとろく・おきの葉・花をおる・おりふし・おとろへ・おなし事・おつる・事ノおこり・おろそか・おきゐて・おりたつ・おふる・おはな・おさなし(幼)・おさむ(治)・おしむ(惜)・おり(折)・をくる(送)・をくる(遅)・をこす(遣)・をこたる(怠)・をこなふ(行)・をす(押)・をそし(遅)・をとづれ(訪)・をのれ(己)・をもし(重)・をる(織)・とをし(遠)・なを(猶)・なをさり(等閑)(語中に「を」をもつ語を含む)

これらの語を、『春日権現験記絵』詞書と『撰集抄』(松平本)でどのように表記しているかを見てゆくことにする。

『撰集抄』と『春日権現験記絵』詞書との使用語比較 (二)

おつる	おなし事	おとろへ	おりふし	花をおる	おきの葉	おとろく	おもふ	おほかた	おく山	をろか	をんな	風のをと	をのこ	をく露	玉のを	をみなへし	定家の仮名遣い	歴史的仮名遣い	『春日権現験記絵』詞書の用例数			定家に同	定家に非同	漢字												
																			定家に同	定家に非同	漢字															
おつる	おなし事	おとろへ	をりふし	花ををる	をきの葉	おとろく	おもふ	おほかた	おく(奥)山	おろか	をんな	風のおと	をのこ	おく(置)露	玉のを	をみなへし	定家の仮名遣い	歴史的仮名遣い	4	9	1	4	2	4	37	1	1	3	0	4	13	定家に同	定家に非同	漢字		
																			2	3	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0						
																			0	3	0	0	1	3	40	1	0	5	0	3						
																			11	7	4	7	7	1	5	100	0	3	10	0	3	2	20	2	2	定家に同
																			4	0	0	1	0	0	1	0	0	13	1	1	2	23	0	0	定家に非同	
																			28	33	3	9	4	5	16	402	7	12	2	34	8	7	25	0	3	漢字

定家の仮名遣い	歴史的仮名遣い	『春日権現験記絵』詞書の用例数			『撰集抄』の用例数		
		定家に同	定家に非同	漢字	定家に同	定家に非同	漢字
定家の仮名遣い	歴史的仮名遣い	定家に同	定家に非同	漢字	定家に同	定家に非同	漢字
事ノおこり	事ノおこり	7	3	2	8	0	7
おろそか	おろそか	2	0	0	1	1	0
おきゐて	おきゐて	0	1	0	7	1	0
おりたつ	おりたつ	5	6	1	5	0	0
おふる	おふる(生)				7	3	5
おはな	おはな(尾花)				0	1	2
おさなし(幼)	をさなし	1	0	1	3	0	1
おさむ(治)	をさむ	2	1	0	10	4	4
おしむ(惜)	をしむ	1	2	0	3	0	2
おり(折)	をり				3	0	2
をくる(送)	おくる	1	0	0	2	0	21
をくる(遣)	おくる	1	0	0	4	7	0
をこたる(怠)	おこたる	4	0	0	5	2	0
をこなふ(行)	おこなふ	4	1	0	2	1	19
をす(押)	おす	1	0	0	6	1	7
をそし(遅)	おそし				3	2	0

なを(猶)	なほ	なほさり	なを(遠)	とほし	なほさり	なを(織)	おる	をもし(重)	おもし	をのれ(己)	おのれ	をとづれ(訪)	おとづれ
1	6	1	0	0	0	3	0	3	1	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	26	1	0	0	3	1	0	4	3	0	0	5	1
0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
0	12	14	0	0	0	0	0	3	0	0	0	5	1

『春日権現験記絵』詞書では、定家の仮名遣いと比較可能な語は、二十九。その内、定家の仮名遣いに同じ表記の語は十六語。その十六語の内、十一語は、歴史的仮名遣いとは相違する定家仮名遣い独自の表記に同じである。

『撰集抄』(松平本)では、定家の仮名遣いと比較可能な語は四十語で、その内、定家の仮名遣いに同じ表記の語は十七語。その十七語の内、歴史的仮名遣いとは相違する定家仮名遣い独自の表記に同じ語は、九語である。

まとめ

『春日権現験記絵』詞書の語彙索引作成中、語頭に「お」及び「を」をもつ語に表記の一定しない例の多いことに気付いた。

助詞「を」は、「を」とのみ記されるので、「お」「を」のかなの区別意識はあったことが理解される。自立語をみる

と、同語の同活用形が「お」「を」二種に表記される例があり、「お」と「を」は自由に使用されているように思われる。一方、歴史的仮名遣いと同じ表記のみ現れる語、歴史的仮名遣いに相違する表記のみ現れる語もある。

『撰集抄』（松平本）もまた、「お」と「を」のかなの区別意識はあるが、「お」「を」は自由に使用されていると思われる。歴史的仮名遣いに一致する表記と相違する表記の混在する語、歴史的仮名遣いと同じ表記のみ現れる語、歴史的仮名遣いに相違する表記のみ現れる語があることも、『春日権現験記絵』詞書の場合に同じである。

注

(1) 実際の音については「・・・ア行のオとワ行のヲは中古に・・・区別を失っているが、その音価は中世を通して・・・[o.w]であったと考えられる。・・・オ段の音節の母音は、・・・[o]と考えられている」(『国語学研究事典』228頁)。

(2) 巻番号と通巻の行数番号。(743)は、巻七の434行目。『続日本の絵巻13 春日権現験記絵 上』では、45頁。

(3) をのづから(自ら) — 『仮名遣と上代語』365頁下段・368頁上段・369頁上段 『定家仮名遣の研究』(遠藤和夫二〇〇二年) 134頁・193頁。

をふ(追ふ) — 『仮名遣と上代語』362頁下段・366頁上段・368頁上段 『定家仮名遣の研究』130頁。

おし(惜し) — 『仮名遣と上代語』343頁下段・349頁上段・354頁下段・363頁下段 『定家仮名遣の研究』135頁・199頁。

(4) をづ(怖づ) — 『定家仮名遣の研究』132頁。

をかし — 『仮名遣と上代語』354頁下段・359頁下段・363頁下段・366頁下段。

をこがまし — 『仮名遣と上代語』363頁下段。

おさおさし（長長し）―『仮名遣と上代語』343頁下段・359頁下段。
おの（斧）―『仮名遣と上代語』344頁下段・350頁上段・355頁上段『定家仮名遣の研究』196頁。